

### ニュースの物語の重層性

OISHI, Yutaka / 大石, 裕

---

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林

(巻 / Volume)

56

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

151

(終了ページ / End Page)

161

(発行年 / Year)

2010-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021078>

# ニュースの物語の重層性

大石 裕

## 1. はじめに一物語論について

事実を伝えるニュース、そして「人々が頭の中に描く世界」(W.リップマン)を構築するニュース・テキストについて、「文化としてのニュース」(Ettema, 2010, 参照)という視点、そしてそれと深く結びつく「物語(narrative)」という枠組みで捉える手法(物語分析)が次第に一般化してきた。事実を中心に構成されるニュース・テキストについて物語という観点から、あるいはそうした枠組みを用いて分析することは、一見整合性を欠くようにも見えるが、この手法はこれまで多くの研究者によって採用され、その有効性や妥当性が確認されてきた。

物語とは一般に、「あるストーリー(それはフィクション、ノンフィクションを問わない)の構成を決定する装置、戦略、慣例」(O'sullivan et al., 1994: 194)と定義されている。ただし、本稿の主たる関心であるニュース(テキスト)の物語分析という点からすると、この定義をより深化させる必要がある。そこで「物語」論に関しては、以下の整理が有用と思われる(Edger and Sedgwick, eds, 2002: 253, 参照)。

- ①物語を以下の要素間の構造化された諸関係から成立するものとして捉える物語論(G.ジュネットなどの構造主義論)。それは、語られた出来事、その出来事が生じた歴史的経緯、物語で提示された出来事の推移、語り手の視点と論調、語り手とオーディエンスとの関係、そして物語行為それ自体、といった要素間の諸関係である。
- ②上記の構造主義の論者とは異なる手法を採用し、意味の生成における読み手の役割を強調する物語論(R.バルトなどのポストモダニズム論あるいはポスト構造主義論)。
- ③社会における支配的価値観、それに基づく歴史観、それを共有することで生じる集合的アイデンティティに着目する大きな(メタ)物語論。その一方、これとは反対の立場から、大きな物語の終焉を主張する見解もあり、そこでは社会の多元性や異質性が強調される(F.リオタールなどのポストモダニズム論)。

物語(論)についてはこのように重層的に把握することが可能であり、以下で論じるように、こうした視点に立つことはニュースの物語分析を行う際には重要と考える。それに加えて、ここで強調すべきは、ニュース論において物語分析が影響力を強めてきた最も大きな要因として、従来のメ

ディア効果研究が採用してきた送り手、そしてニュースが受け手に与える効果や影響という問題関心とは異なる視点、すなわちニュース・テキスト、そしてニュースにまつわる意味が重視されるようになってきた点である<sup>(1)</sup>。これはむしろ、ニュース研究にとっては大きな視座転換をもたらすものであった。それはたんに、従来のメディア効果研究とはまったく異なる視点を提示したというだけにとどまらない。なぜなら、そこではジャーナリストがどのようにして出来事をニュースに変換し、ニュース・テキストを構成し、出来事を意味づけ、その結果、ニュース・テキストがいかなる意味を有するようになるのか、さらにはオーディエンスがニュース・テキストの意味をどのように理解し、解釈するかという一連の問題が、きわめて重要な位置を占めるようになってきたからである。加えてそうした関心は、ニュース・テキストを通じて社会全体の価値観の分布、あるいは支配的な価値観を見出すという問題関心へと結びつくからである。

本稿は、物語分析の意義とその必要性を認めつつ、物語（分析）の重層性という観点からニュース論、さらにはニュース・バリュー論やジャーナリズム論について再考を試みるものである。

## 2. ニュースの物語と、関連する諸概念

物語分析では、ニュース・メディアからオーディエンスというニュースの流れではなく、ニュースという情報が社会に及ぼす長期的な影響、すなわち累積的な影響や作用という観点からニュース・テキストの分析を行うことが重要になる。すなわち、ニュースという情報によって形成される知識や記憶、そしてその集積体としての出来事や社会に関するイメージにまで踏み込んでニュースの生産過程や受容（消費）過程について考察を加えることが重要になるのである。この問題に目を向けるならば、物語行為に関する以下の指摘は多くの示唆を与えてくれる。

「われわれは過ぎ去った知覚的体験そのものについて語っているのではなく、想起された解釈学的経験について過去形という言語形式を通じて語っているのである。『知覚的体験』を『解釈学的経験』へと変容させるこのような解釈学的変形の操作こそ、『物語る』という原初的な言語行為、すなわち『物語行為』を支える基盤にほかならない。」（野家、2005：18）

この物語（行為）論は、前掲の「物語」論と同様、ニュース・テキストに直接言及するものではない。しかし、社会で共有される知識、記憶、イメージに対するニュース・テキストの影響力という観点からするときわめて興味深いものである。というのも、ここで言う「解釈学的変形の操作」と、ニュースの生産過程と受容過程における既存の知識、記憶、イメージの再生産あるいは変化とは密接に関連するからである。この問題に関して、野家は次のように述べる。

「物語られる（テキスト化される）ことによってはじめて、断片的な思い出（出来事）は『構造化』され、個人的な思い出は『共有化』される（集会的記憶）。『物語る』（テキストの生産）という言語行為を

通じた思い出の構造化と共同化（集合的記憶の制度化）こそが、ほかならぬ歴史的事実の成立要件なのである。それゆえ、歴史的事実は、ありのままの『客観的事実』であるよりは、むしろ物語行為によって幾重にも媒介され、変容された『解釈的事実』と呼ばれねばならない。」（カッコ内引用者；野家，2005：121-122）。

この指摘にもあるように、史料あるいは証言に基づく「歴史的事実」には必然的に「解釈、編集、あるいは偏向」という行為が関わるのであり、それゆえに「歴史的事実」は確かに「解釈的事実」にはほかならない。同様に、社会的出来事を記録するニュース・テキストもここで言う「解釈的事実」である。ニュース・テキストとは、社会的出来事をテキストによって再現（時には中継）したものであり、また「解釈的事実」を記録ないしは構成したものである。そして、それらの「解釈的事実」の生産や消費を通じて「解釈学的経験」は積み重ねられるのである。加えて、ニュース・メディアに含まれる様々なテキスト、すなわち社会的出来事に関する解説、論評（社説も含む）といったものも、「解釈学的事実」あるいは「歴史的事実」を構成する要因だと言える。さらには、それらのメディア・テキストを通じて社会で共有される知識、記憶、イメージは形成、構成、そして再生産され、それらは時には大きく変化するである。

このようにニュースの物語論は、物語（行為）論の応用領域という一面をもっている。その一方、知られるようにニュースの物語論に影響を及ぼしてきたのは批判的言語学・記号論である。実際、そこでは物語論の中心に位置するテキストの意味に関しては、「社会全体、そしてその中の階級や集団が自らを維持し、再生産する諸手段に深く絡み合っている」（Wayne, 2003: 166）と説明されている。なかでも、それらの研究と親和性をもちつつ展開された、1970年代から80年代にかけてのカルチュラル・スタディーズに関わる諸理論はニュースの物語論に大きな影響を与えた。以下の指摘はその状況を的確に要約している。

「言語の役割に焦点をあわせることは、個人的というより、社会的に意味がどのように生産されるかという問題を説明するのに寄与した。それは同時に、権力関係を研究対象とすることでもあった。この種の研究は、ニュースが記号とコードの両者から成り立つという考え方を発展させた。ここで言う記号とは意味を生産する個々の言語を指し、コードとは言語を取り巻く社会的かつ文化的秩序と結びつきながら言語を組織化する手法を指す。」（Zelizer, 2004: 119）

言語とコードをこのように捉えることは、ニュース・テキストの意味を考察する際には有益である。そして、この種の問題関心をより鮮明にし、（ニュース）テキストを動的に把握するための分析枠組みを提示した研究手法、それが（批判的）言説分析である。そこで以下では言説分析に焦点をあわせて、ニュースの物語分析について論じることとする。

言説分析について検討する場合、「①テキスト、②言説実践、そして③社会文化的実践を体系的に結びつけようとする試み」（Fairclough, 1995 ; 17）という見解が有用である。また、この見解に

依拠して言説分析をニュース・テキストに適用する際には、①ニュース・テキスト、②ニュース・テキストの生産過程と消費（解釈）過程という制度化された実践、③ニュース・テキストの生産過程と消費過程を規定する広範な社会的文脈、すなわち「経済的文脈」、権力、イデオロギー、ヘゲモニーの問題と関連する「政治的文脈」、価値やアイデンティティの問題と関連する「文化的文脈」、というように研究対象と視座が設定されることになる（*ibid* : 57-62 ; 大石, 2005 : 158-159）。

ただし、ここで注目すべきは、「比較的同質の形態や意味を有するテキストの中で発現し、作用する因習的な言説実践」に加え、「比較的異質の形態や意味を有するテキストの中で発現し、作用する創造的な言説実践」の存在が指摘されている点である（傍点引用者、Fairclough, 1995 ; 60）。この場合、「因習的な言説実践」は社会の既存の支配的価値観を維持、再生産するのに寄与するが、それに対して「創造的な言説実践」はそうした支配的価値観を変革する契機を提供すると考えられている。このように、とりわけ権力（関係）を中心に言説分析を捉えた場合、ニュース・テキストをめぐる一連の諸過程に関しては、以下のような問題群としてを設定し直すことができる。それは、第一にテキストの生産という社会的実践をめぐる権力、第二にテキストの理解を形成するテキストの権力、第三にこうした統制に抵抗する読み手（オーディエンス）の側の権力、第四に社会を再生産、ないしは変革する人々の権力である（Richardson, 2007: 45）。

### 3. 言説実践における物語の機能—ニュース・テキストの生産過程を中心に—

ここでは言説実践（ニュースの生産過程と消費過程）と物語（行為）との関連について検討する。そこでまず、出来事やニュースの情報源と、ニュース・テキストの生産者（ジャーナリストやニュース・メディア）との関係に注目してみる。その際、ニュースの生産過程が出来事の解釈と意味づけの過程であることを再度確認することが重要になる。すなわち、ジャーナリストは出来事の「読み手」として出来事をニュースに変換し、ニュース・テキストの生産を行うのである。この過程で出来事を構成する諸要因が選択、編集、解釈され、出来事やニュースはニュース・テキストとして物語化される。

これら一連の行為は個々のジャーナリストによって担われるが、その一方、ジャーナリストという専門職業人の集団、ニュース・メディアの組織や業界といった「解釈共同体」の中で行われる点は強調されるべきである。こうした「解釈共同体」の内部では、ジャーナリストの間で例えばスクープをめぐる熾烈な競争があるのは周知の通りである。ただし、以下の指摘を参照するならば、個々のジャーナリストが「解釈共同体」を構成し、制度化された枠組みの中で活動していることがわかる。

「共通の土壌で共通の行動原理のによって競争する記者集団は相互に自らによく似た仲間を見出しつつ、意識的にも無意識的にも所属組織を越えた同調性志向を育てるから、時に応じて、情報の交換や共有、さらには談合による情報の選択・意味づけといった協力関係を取り結ぶことは稀ではなくなる。ニ

ニュースの記事化にあたっては、自社内の同一分野のデスク、先輩、同僚、後輩記者が『第一の読者』であり、他社の同一分野の競争相手である記者たちが『第二の読者』とされる…。」(林, 2006: 92)

ただし、ニュースの生産過程においてジャーナリストが必ずしも出来事の直接の観察者ではない場合が多い点は強調されるべきであろう。というより、その方がはるかに一般的である。前掲の言葉を借りれば、この状況はジャーナリストの「知覚的体験」の間接化と呼びうる。その際、出来事の当事者あるいは目撃者を情報源（ニュース・ソース）として、ニュースはその出来事を再現することになる。それゆえに、専門職業人としてのジャーナリストは通常は（できるだけ）複数の当事者や目撃者から情報を入手し、正確さを期すようにしている。

それに加えて、情報源となる人々にしても、彼らが出来事の当事者や目撃者とは異なるケースが多々あることも強調されるべきであろう。この場合、ニュースの生産過程は、とりあえず「社会的出来事→情報源→ジャーナリスト/ニュース・メディアによるニュース・テキストの生産」という一連の過程として示すことができる。ジャーナリストの情報収集の過程では、このようにジャーナリストと出来事との間に情報源が介在することが多い。例えば政治家、公権力の執行機関（警察や検察など）、官僚、さらには企業の広報担当者などに対する取材、ないしは記者会見による情報入手などがそれにあたる。こうした取材方法への依存度を高めることは、「発表ジャーナリズム」（原寿雄）と呼ばれ、特に日本のジャーナリズム批判においてこれまで厳しく批判されてきたのは周知の通りである。

ジャーナリストは、確かに出来事をニュース・テキストに変化させる主体であり、主導権を握っていると捉えられるが、ここで見てきたようにその作業の内実はかなり複雑である。というのも、出来事の当事者や目撃者といった一次の情報源による情報の編集あるいは操作、そしてそれらの人々とは異なる情報源、すなわち二次の情報源によるジャーナリストやニュース・メディアに対する説得や操作は日常的に行われているからである<sup>(2)</sup>。これらの情報源もやはり、出来事を物語化しており、それゆえ彼らの語りは物語行為なのである。この場合、ジャーナリストやニュース・メディアは、そうした物語を再度編集することでニュース・テキストを生産することになるのである<sup>(3)</sup>。

#### 4. 言説実践における物語の機能②—間テキスト性の問題を中心に—

批判的言説分析の中心概念の一つとして、間テキスト性をあげることができる。間テキスト性の基本的な視点は以下のように簡略に説明されている。

「テキストを個別に考えたり、研究したりすることはできない。なぜなら、テキストは個別に生産されたり、消費されたりすることはないからである。すなわち、テキストはすべて他のテキストとの関連性の中で存在し、それゆえにそうした関連性の中で理解されなければならない。」(Richardson, 2007: 100)

ニュース・テキストもむろんその例外ではない。リチャードソンは、ニュース・テキストを分析するにあたり間テキスト性をテキスト内部のそれ（以下、内的間テキスト性）と、テキストと外部のテキストとのそれ（以下、外的間テキスト性）とに分類する。内的間テキスト性に関しては、以下のように論じられている。

「あらゆるテキストは以前のテキストの断片や諸要素から成り立つ、あるいはそれらによって構成される。これは特にニュース報道に当てはまる。ニュースは必ず他者の行為や意見を再生産している。ニュースには以下に示す3つのテキストのいずれか、あるいはすべてが含まれることがある。そのテキストの第一は、報道発表である。第二は、情報源からの引用である。その引用は、報道した行為や出来事に直接関わる人物（情報提供）、ないしはそうした行為や出来事に関する解説や論評（評価）のいずれかである。第三は、ニュース・メディアのアーカイブから切り取った背景情報である。」(ibid: 101-102)

内的間テキスト性とは、前述したジャーナリストと出来事との間に情報源が介在する場合、およびジャーナリストやニュース・メディアが蓄積している情報を参照し、出来事を物語化するケースを説明するものである。ただし、ここでより注目したいのは、以下のように要約される外的間テキスト性の方である。

「テキストを十分に理解するためには（あるいはむしろ、テキストの詳細な意味、あるいはより完全な意味が明らかになるのは）、テキストが他のテキストや社会的実践との関係の中で文脈化され、『読解』される場合である。…我々は報道された最新の記事を読む際、知識の中でそれを行う。換言すると、我々はその記事がある連鎖の中で他の記事と結びつくことを知っている。」(ibid: 100-101)

この観点に立つと、ニュース・テキストは他のニュース・テキストや社会的実践との関係の中で意味づけられ、物語化されることになる。ただし、他のニュース・テキストに関しては、以下のように分類することが必要である。第一は、同一の出来事に関する既存のニュース・テキストとの関係である。すなわち、ある出来事が一定の時間の幅で展開されると、過去のニュース・テキストが当然参照され、それと直近の出来事とが関係づけられ、意味づけられ、物語化されるのである。この場合、直近の出来事の中に新たな要素が存在することがあっても、既存のニュース・テキストのフレームが作動し、出来事の意味が限定され、規定されてしまうこともある。

第二は、過去に生じた類似の出来事に関するニュース・テキストとの関係の中で、出来事が意味づけられ、物語化される場合である（それは時には数十年間、あるいはそれ以上にまで遡ることもある）。この場合、ジャーナリストやニュース・メディアは、出来事のあるカテゴリーに属するものと捉え、過去の類似の出来事に関するニュース・テキストとの関係の中で出来事のニュース・テキストを作り上げ、物語として提示することになる。ジャーナリストが有する、あるいは専門職業人としてのジャーナリストによって継承されてきた物語、さらには知識、記憶、イメージに影響さ

れながらニュース・テキストが構成され、出来事が意味づけられ、物語化されると言ってもよい。どのカテゴリーに出来事が属するかという判断は、出来事の意味にとってきわめて重要である。この作業によってニュース・テキストの理解しやすさは増大するが、出来事の本質が報道されないという問題が生じることもある。

第三は、ほぼ同時期に生じた他の出来事、およびそれらに関するニュース・テキストとの関係の中で、出来事のニュース・テキストが生産され、出来事が意味づけられ、物語化される場合である。特に、ニュース・バリューの高いある特定の人物や組織が、複数の出来事（例えば、問題や争点、政策）に関わる場合にこうした事態は生じやすくなる。そうした人物や組織が関わると、本来同一のカテゴリーに属していない複数の出来事、あるいは異なる出来事を扱う複数のニュース・テキストが、その人物や組織を中心に構成されたフレームの中で互いに関係づけられることになる。それにより、それらの出来事やニュース・テキストは物語化され、意味は規定されることになる。

それに加えて、最後に指摘しておきたいのは、ニュース・テキストの構成や意味に影響を及ぼすのは、必ずしも過去の出来事やそれに関するニュース・テキストだけではないという点である。先に、専門職業人としてのジャーナリストによって継承されてきた物語、そして知識、記憶、イメージがニュース・テキストの構成や意味に影響を及ぼすと述べたが、そうした物語、そして知識、記憶、イメージに対しては、ニュース・メディア以外のメディアやテキスト、例えば小説、映画、ニュース以外のテレビ番組（例えば、ドラマやワイドショー）などによって提供されたテキストも影響を及ぼすのである。ここにジャンルを越えた外的間テキスト性が見出せるのである。

ここで確認しておきたいのは、ニュース・テキストの生産過程という問題を中心に据えるならば、前述したように、その過程ではとりあえずはジャーナリストやニュース・メディアがその主導権を持つという点である。それは例えば、「フレーミングとは、出来事に関するジャーナリストの解釈とそうした解釈が意味づけられる文脈の両者を反映すると考えられる。それは、オーディエンスがニュースを解釈する準拠フレームをジャーナリストが設定するという作業を伴う」（Zelizer, 2004: 141）という指摘に見られる。ところが同時に、外的間テキスト性を問題にするならば、専門職業人としてのジャーナリストやニュース・メディアだけを対象とするだけでは不十分であると言える。実際、出来事に関する物語、そして知識、記憶、イメージというのは一般に社会の構成員の間で共有されている。こうした観点、そして前述した大きな（メタ）物語という観点からニュースの物語について考察を加えるならば、以下で論じるように、言説分析におけるもう一つの問題である社会文化的実践と言説実践との関連について論じることが必要になる。

## 5. 大きな（メタ）物語と社会文化的実践

大きな（メタ）物語に関して、これまで興味深い見解を提示したのはD.ベル（イデオロギー終焉）であるが、F.リオタールは以下に見るように近代化の進展に伴って成立してきた大きな物語に対する疑念を表明した。

「科学はみずからのステータスを正当化する言説を必要とし、その言説は哲学という名で呼ばれてきた。このメタ言説がはっきりとした仕方ではなんらかの大きな物語—《精神》の弁証法、意味の解釈学、理性的人間あるいは労働者としての主体の解放、富の発展—に依拠しているとすれば、みずからの正当化のためにそうした物語に準拠する科学を、われわれは《モダン》と呼ぶことにする。…極度の単純化を懼れずに言えば、《ポスト・モダン》とは、まずなによりも、こうしたメタ物語に対する不信感だと言えるだろう。」(リオタール, 1979=1986: 8-9)

近年、例えばグローバリゼーションの一層の進展により、こうしたモダン（の概念の有用性）に対する不信感是一段と増大してきたが、その一方でモダンを構成してきた大きな物語がいまだにポスト・モダンへの移行を妨げているという現実がある。大きな物語は時代や社会によって変化し、様々な変種を生み出してきたものの、現代社会においてもやはり大きな役割を担っていると言える。例えば、国民国家と連関するナショナリズムや国益といった政治システムに関する大きな物語、資本主義や新自由主義（あるいは社会主義）などの経済システムに関する大きな物語、福祉社会やコミュニティの必要性といった社会システムに関する大きな物語、そして技術の発展や進化という大きな物語が、現在もなお根強く存在する。それらは互いに連関し、補強し、時には反発し合いながら、少なくとも欧米を中心とする先進産業社会では自由や平等といったモダンの基本理念を参照しながら、一群の信念システム（イデオロギー）として機能しているのである。

もちろん各々の社会には、個別の大きな（文化的）物語が存在し、それらがモダンを構成する理念的と呼ぶ上掲の大きな物語と接続する場合がある。あるいは、相容れない場合もある。ただし、こうした個別の大きな（文化的）物語にしても、それを共有する社会の構成員は社会の「常識」に依拠しつつ、比較的同様の思考様式や行動様式を身につけることで、「創られた伝統」(H.ホブズボーム)の再生産（時には修正）に寄与している場合が多く見られる。あるいは、「想像の共同体」(B.アンダーソン)という国民国家の一員として、国民文化、そして集会的記憶としての国民的記憶の再生産（時には修正）に寄与している場合がほとんどである。

このような視点に立つ時、近代社会のジャーナリストとニュース・メディアによるニュース・テキストの生産過程、そしてオーディエンスによるニュース・テキストの消費過程という言説実践が、社会文化的実践の一部であると同時に、その中で中心的位置を占めていることが理解される。言説実践とは、前述した社会文化的実践を構成する経済的文脈、政治的文脈、文化的文脈によって規定されつつ、またそれらを再生産する過程なのである。ただし、やはり前述した「創造的言説実践」に着目するならば、こうした社会文化的実践の中に、出来事やニュース・テキストに関する既存の支配的な物語による統制に抵抗し、その変革を試みる（交渉的コードや対抗的コードによる多様な読み；S.ホール）ジャーナリストやニュース・メディア、そしてオーディエンスの存在や機能を組み入れることの必要性和重要性が認識される。特に、ジャーナリストは専門職業人としての制約が存在することから、支配的物語の影響を受けやすいという一面をもつが、他方で「象徴エリート」として自らの言説実践を客体化しながら意識的かつ合理的に創造的言説実践に関与する可能性を有

するのである。

## 6. 結び—物語の重層性とニュース・バリュー—

かつてニュース・バリューに関しては、ジャーナリストやニュース・メディアがニュースの生産過程において用いる出来事を選択基準、また報道するニュース項目の順序づけ、そしてスペースや時間の配分を決定する際の基準という理解が一般的であった。専門職業人としてのジャーナリスト、そしてその集合体としてのニュース・メディアは、自らが獲得した価値基準（あるいは感覚）に照らして、またジャーナリズムという「解釈共同体」という制度化された枠の中で出来事をニュースに変換するのであり、その際に用いる基準がニュース・バリューと呼ばれてきた。従って、ニュース・バリューという基準に照らして生産されたのがニュース・テキストなのであり、そこでの視点の中心はニュースの生産過程とニュース・テキストということになる。

しかしながら、本稿でこれまで論じてきた物語論を見ると、こうしたニュース・バリュー論の理解だけでは不十分なことがわかる。本稿では、様々な社会文化的実践の中で大きな物語が具体化され、その実践の中心に位置するのがニュースの生産過程と消費過程という言説実践であること、そしてそうした言説実践の産物がニュース・テキストであるという見解を提示してきた。前述した外的間テキスト性という観点を取り入れるならば、ニュース・テキストの生産という言説実践は、大きな物語の枠内にある多様な社会文化的実践の中では、（その中心には位置しながらも）一つの構成要素と見ることができる。従って、ニュース・バリューにしても、それとニュース・テキストの関係だけではなく、オーディエンスによるニュース・テキストの消費過程という言説実践との関係、他の種類のテキストに関する言説実践との関係、そしてそれ以外の社会文化的実践をも含む大きな物語との関連から考察を加えることが必要なのである。逆から見れば、ニュース・テキストを形成する基準としての、あるいはジャーナリズム論の最も重要な研究対象であるニュース・バリューに関しては、こうした物語の重層性を認識しながら分析することが不可欠であり、それが権力（関係）という視座を採用するジャーナリズム研究のまさに中心に位置すべき作業と考えられるのである。

〈注〉

- (1)ただし、メディア効果研究も「伝統的」なアプローチを継承しつつも、フレーミング、物語、さらにはアイデンティティといった概念を取り入れたり、またジャーナリズムにおけるニュースの生産過程、特にニュース・バリューの問題も視野に収めるようになってきた。(例えば、Willis, 2007, 参照)
- (2)ここであげた「情報源 (の戦術と戦略)」も含め、ニュースの生産過程に対する影響要因は以下のように要約されうる (McNair: 1998, pp.13-16 ; 大石 : 2005 : 27-28, 参照)。①専門家の文化と組織的な制約——ジャーナリズム活動の指針となる一連の専門的な倫理、特有のコード、日常的な実践。例えば、客観的な報道姿勢、ニュース・バリューなど。②政治的圧力——ジャーナリストが活動する際に作用する政治家や政治システムからの影響力。これには、検閲、政府による情報統制や情報操作、さらには政治文化や政治体制の影響が含まれる。③経済的圧力——経済的な所有や統制のメカニズムに象徴される、ジャーナリズムに対する経済的な影響力。情報の商品化という要因も、ジャーナリズムの報道の仕方や情報内容に対して影響する。④技術的可能性と制約——ニュース情報の収集や生産にとって必要な技術が、ジャーナリストの活動に及ぼす影響。⑤情報源の戦術と戦略——ジャーナリズムの言説は、ジャーナリズム以外の行為者 (例えば、政治家、圧力団体の活動家、警察や労働組合などの公的組織、映画やスポーツの有名人) の情報活動によっても形成される。この種の人々や組織の大部分が望むのは、ジャーナリズムでできるだけ肯定的に報じられることである。なお本稿での、「解積共同体」とそれをめぐる検討は、これらの影響要因の中の「専門家の文化と組織的な制約」に関するものである。
- (3)ニュースの物語に関して、従来のニュースの物語論を参照しながら、私自身以下のような考察を試みたことがある (大石, 2005 : 167-170)。そこでは、ある出来事を構成する複数の要因、あるいは複数の出来事を一定の技法によって配列し、ニュース・テキストを構成する手段を「技法的物語」、そして社会の価値観の分布を構成する、ないしは社会の支配的価値観を再生産 (時には変革) する作業と関わるものを「価値的物語」と名づけた。本稿では以下、技法的物語という形式によって発現、あるいは発動する価値的物語を中心に検討していく。

〈参考文献〉

大石裕 (2005) 『ジャーナリズムとメディア言説』 勁草書房。

林利隆 (2006) 『戦後ジャーナリズムの思想と行動』 日本評論社。

Edger, A and Sedgwick, P (eds) (2002) *Cultural Theory: Key Concepts*, Routledge.

Ettema, J. (2010) 'News as Culture' in Allan S. (eds) *The Routledge Companion to News and Journalism*, Routledge, 289-300.

Fairclough, N. (1995) *Media Discourse*, Edward Arnold.

McNair, B. (1998) *The Sociology of Journalism*, Edward Arnold.

O'sullivan, S. et al. (1994) *Key Concepts in Communication and Cultural Studies*, Routledge.

Richardson, J. (2007) *Analysing Newspapers*, Palgrave.

Willis, J. (2007) *The Media Effect*, Praeger Pub..

Wayne, M. (2003) *Marxism and Media Studies*, Pluto Press.

Zelizer, B. (2004) *Taking Journalism Seriously*, Sage Pub..